

主 題：カウ：神のことばと唯一の希望
聖書箇所：詩篇 119篇81-88節

どうぞ、詩篇119篇をお開きください。今朝、こうして皆さんといっしょにこのすばらしい詩篇を見る機会が与えられるに当たって、私は神の良さを、そのすばらしさを心から思います。なぜなら、この詩篇119篇は22の詩文節に分かれています、その一つひとつを学んでいき、そこから学び取ったことを思い浮かべる度に、そこで教えられて来たことが私自身の歩みの大きな力となっていたこと、原動力になっていたことを思うからです。実は、最初の1節から8節を見たのは2010年8月だったのですが、そこから学び始めて、特に、ここ最近6ヶ月間、私がこの詩篇119篇から学んだことは、何よりも私自身の歩みを支えるものでした。

皆さんにもうすでに話したように、著者はこの詩篇を22の区分に分けて、一つの区分は8節ごとになっていて、それぞれの区分の一行目の最初の単語がヘブライ語のアルファベットの文字となるように、そのような構成でこの詩篇を書き綴って来ました。22ある区分のその一つひとつは確かに一つの詩篇を構成する訳ですが、その一つひとつが独自の特徴を持つものでありました。それぞれが神のみことばを通して働きがいかによいもので、いかに私たちに必要なものであるのかを、いろいろな形で私たちに教え続けてくれるのです。

感謝なことに、神は今日と来週の2回、皆さんといっしょにこのみことばを学んでいく機会を私に与えてくださいました。神が教えてくださったこと、それを皆さんとお分ちすることができること、また、神が私自身にも皆さんにもこのみことばを通して勇気を与え力を与え、神が望む者にならっていくことができるように、私たちに働きかけてくださるその機会を備えてくださっていることを何よりも感謝しています。

今朝、私たちはごいっしょに第11番目の詩文節を見ていきます。81節から始まるこの第11番目の詩文節は、ちょうど、22の区切りの前半の最後を結ぶ詩文節です。これまで私たちはもうすでに、この詩篇の著者がいかに神のみことばに関するすばらしい知識を持ち、そのみことばを心から願ひ求め、慕ひ求め、このみことばに忠実に歩んでいこうとしているその決意を見て来ました。同時に私たちは、この詩篇の著者がこれを書くに当たって、どれほど多くの困難や苦しみや問題の中にあっただのかということも見て来ました。彼の周りには敵がいて、彼は自分のいのちさえも危ないと感じることが度々あったのです。そのような危険の中で、そのような迫害の中で、そのような困難の中で、著者はこの詩篇を書き綴って行きました。

特に、この第11詩文節の直前の二つ三つの詩文節は、彼が自分の生涯における苦しみを切々と訴える、そのような内容になっていたことを皆さんも覚えてくださるのではないかと思います。彼の心は弱っていました。彼の心は葛藤を抱えていました。そんな中で、前半の最後を締めるこの11番目の詩文節で、この著者は悲しみの最も深みへと落ちて行きました。ある注解者たちはこのように言います。「この11番目の詩文節は、詩篇119篇の全体の中で最も暗いものである。」と。私たちはここに、著者が絶望の果てに置かれてしまっているその姿を見ます。彼の苦しみ、彼の嘆き、悲しみ、落胆が、この81節から88節の間を流れ続けているのです。私たちもみな、このような時期を経験します。私たちが経験するそれぞれの問題、それぞれの苦しみ、痛み、悲しみは違うでしょう。けれども、私たちがみな同意することができるのは、私たちも自分たちの心が絶望に満たされてしまうことがあるということです。私たちの心が深い悲しみに沈むことがあるということです。いったい、そのような中で私たちがどのようにして希望を見出すのでしょうか？困難に囲まれている中で、苦しみの中で、何をしても良いことが起こっていかないとと思うような状況の中で、いったい、どのようにして私たちは希望を見出すことができるのでしょうか？どのようにして私たちは落胆の果てから這い上がることができるのでしょうか？

これがこの詩篇の著者が私たちに教えてくれることです。著者のことばを通して、私たちが希望を失ってしまうような状況の中であって、私たちの心が完全な絶望に支配され、何一つ光を見ることができないような状況の中で、私たちがどのようにして希望を持つことができるのかを教えられます。それをやるに当たって、著者は正直に自分の絶望を記しています。ですから、これからしばらくの間、私たちは著者が経験した絶望を見ていきます。希望の無くなっていく姿を、彼が心の奥底で嘆き悲しみ、立っていきることができないと思っている姿を見ていきます。そして、そこからどのようにして彼が立ち上が

っていこうとするのか、どのようにして希望を見出すのかを私たちはこの詩篇を通して学んでいきます。みことばを見ましょう。著者はこのように私たちに教えてくれます。

詩篇 119 篇 81-88 節

119:81 私のたましいは、あなたの救いを慕って絶え入るばかりです。私はあなたのみことばを待ち望んでいます。

119:82 私の目は、みことばを慕って絶え入るばかりです。「いつあなたは私を慰めてくださるのですか。」と言っています。

119:83 たとい私は煙の中の皮袋のようになって、あなたのおきてを忘れません。

119:84 あなたのしもべの日数は、どれだけでしょうか。あなたはいつ、私を迫害する者どもをさばかれるのでしょうか。

119:85 高ぶる者は私のために穴を掘りました。彼らはあなたのみおしえに従わないのです。

119:86 あなたの仰せはことごとく真実です。彼らは偽りごとをもって私を迫害しています。どうか私を助けてください。

119:87 彼らはこの地上で私を滅ぼしてしまいそうです。しかしこの私は、あなたの戒めを捨てませんでした。

119:88 あなたの恵みによって、私を生かしてください。私はあなたの御口のさとしを守ります。

著者は非常に明瞭な形で自分の心のうちを私たちに示してくれます。特に、最初の4節において、私たちは彼の経験した絶望がどのようなものであるかを手取るようにはっきりと見ることができます。彼は非常に苦しい困難な状況の中で、細い希望の糸に一生懸命しがみつこうと努力していたのです。私がこのみことばを学び、そのことばに思いを巡らす度に私の心は痛みました。なぜなら、この著者が経験した痛みを感じることができるからです。この著者がもっていた絶望を思うことができるからです。著者はそれ程はっきりと私たちにその希望の無さ、彼の置かれた状況を見せてくれるのです。

確かに彼は、この第11詩文節の終わりにあって絶望の中から希望を見出していきます。けれども、そこに至るまでの間、彼の心は絶望で支配されていました。いったい、どうしてこのような詩篇を書くことができるすばらしい信仰者が、神のみことばに対する知識をこれ程持っている信仰者が、神を信頼し神に献身して生きていこうとしている信仰者が、このような絶望に陥ってしまうのでしょうか？ 私たちはその姿を最初にこのような形で見るすることができます。

☆神のことばと唯一の希望

A. どうして絶望に陥るのか？ 81-87 a 節

この詩篇の81-89節を見るに当たって、カギとなることばは81節、82節、そして、87節に繰り返される一つの単語です。同じ動詞が使われています。81節と82節では同じ訳がされているので皆さんもよくお分かりでしょう。「慕って絶え入る」ということばです。実は、このことばと全く同じことばが87節でも使われていて、ここでは「滅ぼして」という動詞に訳されています。これらはみな同じことばです。このことばのもっている意味は、簡単に言うと「もうおしまいだ」ということです。「終わりが来た、すべてが終わった」ということです。日本語の聖書では81節と82節において、著者がもうどうしようもない自分の姿を伝えようとして使われ、そのように訳しています。そして、87節では、敵が彼をもう終わりにするその姿、それを表わそうとして「滅ぼす」と訳しています。そのことを理解していただいた上で81節から見ていきましょう。

1. 神の心遣いを感じないとき 81-84 節

私たちは神の心遣い、神のケアを見ることができないうとき、感じる事ができないときに希望を失います。彼はそのことを最初の4節で教えています。

1) 予期していたことが起こらないとき 81-82 節

最初に著者が言うことは、自分が希望を失ったのは「予期していたことが起こらなかったから」ということです。81節「私のたましいは、あなたの救いを慕って絶え入るばかりです。私はあなたのみことばを待ち望んでいます。」と、ここで著者は「私のたましいは」ということばを使っています。単に「私」ではありません。次の節では「私の目は」ということばを使います。これらはすべて「自分自身が」ということですが、いかに彼自身が、彼の全体がそのように感じているのかということを表わそうとして、このようにことばを変えて表現しているのです。

・「私のたましいは、」：

彼は言います。「私のたましいは、あなたの救いを慕って絶え入るばかりです。私はあなたのみことばを待ち望んでいます。」と。いくつかの注解書はこの81節のことばをこのように意識（意味を訳すこと）しています。「私はあなたの救いを待ち望んでいて疲れ果ててしまいました。」、また、別の訳は「余にも長い間あなたの救いを待っていたゆえに、私はもう疲れ果てた。」と。彼は神が救いを備えてくださ

る方であるということを知っていました。そのことはこれまでもずっと書いて来たことです。神はそのことをみことばを通して確かに約束しています。けれども、そのような苦しみの中であって、神が救いを与えてくださるということを確認しているゆえに、神の救いを待ち望み続けて来たにも関わらず、それが来なかったのです。状況はいっこうに変わらないのです。

だから、彼は言うのです。「あなたの救いを慕うのだけれど、それを待ち望んで、あなたのみことばの実現を、あなたの約束の成就を私は心待ちにしているけれど、一向にそれが起こらないから私のたましいは絶え入っている。もう、動くことができない。もう、おしまいだと思う。」と。疲れ果ててしまっているのです。神のみ約束を待ち望み、神ご自身の介入を待ち望んで、イザヤが言うように「鷲のように翼をかって谷底から天空へと舞い上がる」ことができる日を心待ちにしているのに、いつまで経ってもそれが起こらないから彼の心は絶え入ってしまったのです。敵が自分の周りには、自分の周りには苦しい、悲しい、痛いことがたくさん起こるのに、どれだけ待っても、期待していること、本来は起こるべきだと思っている神の救いがその場に備えられていかないから、彼の心は落胆して行くのです。

・「私の目は、」：

それだけではありません。82節には「私の目は、みことばを慕って絶え入るばかりです。」とあります。目が疲れた、どれだけ目をこすって、目を凝らして地平線の彼方まで見える限り見続けたとしても、どこからも神の救いの手が現われて来ないと言っているのです。一生懸命ずっと神の手が、神の救いがそこに現われるのを待ち続けるゆえに、この著者は一生懸命目を開けながら、何とかして「それを見る日が来る」と言い聞かせながら、ありとあらゆる所に目を凝らしていたにも関わらず、それがやって来ないから目がもう疲れてしまったと言うのです。目がしょぼしょぼで見ることができない、もう、目を開けていることができない、「私の目は、みことばを慕って絶え入るばかりです。」と言うのです。

皆さん、彼の痛みを感じることが出来ますか？彼の苦しみを見る事が出来ますか？彼の絶望を理解することが出来ますか？確かに、この著者は神に待ち望むことを知っていたのです。それが正しいことが分かっているのです。確かに、この人物は神のみことばのうちに、神にのみ希望があることを知っているのですが、著者も私たちと同じように疲れたのです。「もう動くことができない、もう倒れそうだ」と言っているのです。「もうダメだ。もうおしまいだ。」と。なぜですか？救いがあるはずなのに、助けが来るはずなのに、神がその御手を伸ばして私たちに勇気を与え、力を与え、状況から救い出してくださいとくださるはずなのに、それがいっこうに起こらないからです。

皆さん、そのように彼が考えているから彼はこのように言います。「いつあなたは私を慰めてくださるのですか。」と。「いつ、それが成るのですか？いつ、私を慰めてくださるのですか？」と。この質問の中で彼は自分自身の絶望を顕わにしています。彼は「主よ、あなたは私を助けてくださると思っていました。もうその助けが与えられているはずだと私は考えていました。私は今まで正しく生きて来まし、私はあなたの約束の成就を待ち望んで生きて来まし。でも、あなたはいっこうに私をこの苦しみから救い出してくださいとくださることがありません。もういいではないですか？もうその時期が来ているはずでしょう？いったい、あなたはいつ私を助けてくださるのですか？あなたは私をいつ慰めてくださるのですか？」と。著者が持っている思いに皆さんも同意することができませんか？そのような思いを抱いたことがありませんか？私はあります。祈っても祈っても問題の解決が見えない時に、苦しみから逃れることができない時に、神の慰めの御手を見近に感じる事ができない時に、私たちの心は嘆きます。皆さんも苦しい時に神の救いの手を与えて欲しいと思われるでしょう？

決して、私たちは神のみ約束を忘れる訳ではありません。覚えているのです。分かっているのです。待ち望むべきだということも知っているし、それが正しいことも分かっているけれど、思っている時に来ない、もう限界だと思っているのにそれが現われて来ない、その陰さえも見えない、そのときに、私たちの希望は失望へと変わり、心は絶望で満たされていくのです。これが詩篇の著者が感じていたことです。経験していたことです。

2) 感情に支配されるとき 83-84節

それだけではありません。単に自分の予期していたことが起こらなただけでなく、彼が希望を失ったのは、彼の感情が彼自身を支配したからです。神のケアが見えないから、神の心遣いを感じる事ができないから、私たちは失望するのです。絶望するのです。希望を失うのです。その原因は「予期していたことが起こらない」だけでなく、もう一つは、私たちの心を感情に支配させてしまうからです。83節を見てください。「たとい私は煙の中の皮袋のようになって、あなたのおきてを忘れません。」と。私たちには分かりにくいことば、表現が使われています。「煙の中の皮袋」とはどういうことでしょうか？当時の人たちは、ぶどう酒を入れる皮の袋を持っていました。ぶどう酒がなくなった後、飲み干した後、

袋を乾かすためにそれを天井に吊るすのです。ところがそれを取り外すことを怠っていると、家の中で家事をしたり、暖をとったりするその煙が上に上がって行ってその皮袋についていくのです。それを放っておくと皮袋はカラカラにひからびて、煙で真っ黒になって、もう二度とぶどう酒を入れる皮袋として使うことができなくなるのです。彼が言っているのはそのことです。彼は自分自身が皮袋のように見えたのです。吊るされていていつまで経っても下ろされることのない皮袋のように見えたのです。

神は私を困難、苦難、迫害、苦しみという場所に吊り上げて、様々な問題という煙の中で放置していると考えたのです。彼は「私はもう何の益にもならない者だ」と思っているのです。放置された皮袋のようにもう何にも使うことができない、後は捨てるだけだと。著者はこの状況の中で神のケアを見ることができないから、「私はもう役に立たない者だ。もう、私はどうしようもない者だ。」と思っているのです。しかし、彼はそのような中にあっても確かに、神のみことばを忘れていたわけではありません。だから、このように言います。たといそうであっても「あなたのおきてを忘れません。」と。確かにそうなのです。忘れていた訳ではありません。頭の中に覚えているのです。それが正しいことも知っているし、それにしっかりと忠実に目を向け続けなければいけないということも分かっているのです。

でも、84節を見てください。「あなたの上もべの日数は、どれだけでしょうか。あなたはいつ、私を迫害する者どもをさばかれるのでしょうか。」とあります。ある注解者は「この84節で最も大切なことは、ここに書かれていることではなくて、ここに書かれていないことだ。」と言います。何のことでしょうか？皆さん、気付かれましたか？この84節には、これまで何度もほぼ毎節のように必ず繰り返し登場して来た神のみことばに対する言及が一切出て来ないのです。私は「あなたのおきてを忘れません。」と言いながら、著者は神のみことばを忘れるのです。確かに、ここ以外にも119篇の中には数節、神のみことばに関する直接的な言及がない箇所がありますが、神のみことばや神のすばらしさに関する示唆がない箇所は多分ここだけです。何と言っていますか？「あなたの上もべの日数は、どれだけでしょうか。」と別の訳をすれば「私の生きる日はもう限られている。もう後わずか、数えるばかりです。」と言っているのです。神がすぐにでもやって来て助けてくださらない限り、私はもう滅んでしまいます。後ほんのわずかしか残っていませんと言うのです。そのような状況に陥っているのはなぜでしょうか？彼の敵、神に逆らう者たちがさばかれることなく今もなお彼のことを継続的に責め、苦しめ続けているからです。だから、「あなたはいつ、私を迫害する者どもをさばかれるのでしょうか。」と言うのです。

皆さん、この著者は神が正しい方であるということを知らなかったと思いますか？著者は神が必ずふさわしい時に悪者に対してそのさばきを与えるということを知らなかったと思いますか？皆さんは、この著者が神は苦しみの中にあっても、どんな状況の中にあつたとしても、彼が信頼するにふさわしい巖であり避け所であることを知らなかったと思いますか？皆さんもう分かっていますね。彼もよく分かっていたのです。神が正しい方であり、さばきを与える方であり、どんな状況の中でも私たちが逃れることができる避け所であり、揺らぐことのない巖であることを彼はだれよりもよく分かっていたのです。もうすでに何度も彼はこの詩篇の中で語って来ました。

では、彼は神に信頼をおいて、神を待ち望み続ける必要があることを忘れてしまったのでしょうか？彼は分かっていたのです。彼は待ち望んでいたのです。忘れていた訳ではないのです。でも、私も皆さんもするように、この詩篇の著者でさえも、自分の感情にその心を支配される時に、神が言っている真理が曇ってしまうのです。それをはっきりと見ることができないのです。それにしっかりと目を向けて、それにしっかりとしがみ続けることができなくなるのです。神は助けてくださる、そのはずだ、もうそろそろ神が来てもおかしくない、その助けが与えられてふさわしいに違いないと、そのように思っている時に神の助けが来ないときに、彼の心は感情に支配されています。そこが危険の始まりなのです。そのようにして私たちの心が自分たちの感情に支配されているときに、私たちは絶望という下り坂をまっしぐらに転がり落ちていくのです。その時に私たちは負うことができない重荷を負っていると感じるようになり、その時に私たちは真っすぐ立って歩んで行くことができなくなるのです。この著者と私たちとの大きな違いは、私たちがそのような状況でいつまでも転がり続けていることに対して、著者はその中で希望にしがみつ়くことを知っているのです。そのことが出て来ます。でも、まだ解決には至っていないのです。なぜなら、彼はもう一つ、彼が絶望して行く姿を別の言い方で表わしているからです。彼の告白を続けて聞いて見ましょう。

2. 神の具体的な助けを見ないとき 85-87 a 節

最初に彼は言いました。私たちが神にある希望を失うのは私たちが神の心遣いを感じないとき、ケアを感じないときにそうなる。もう一つ彼が言うことは、私たちが希望を失うのは「私たちが神の具体的な助けを見ないとき」と言います。心遣いを感じないだけでなく、助けを見ないときだと言います。

私たちは同じような道を辿ります。私たちも著者と同じように、私たちの周りを見てそこに起こっている事柄から判断し、それによって間違った結論を出してしまうことが多くあるのです。彼はどのように嘆くのでしょうか？聞いてみましょう。

1) 自分の置かれている状況を思い巡らすから

85節にこのように記されています。「高ぶる者は私のために穴を掘りました。彼らはあなたのみおしえに従わないのです。」と。彼自身の希望が隠されてしまうのは、彼が自分の置かれている状況を思い巡らすからだと言います。自分の置かれている状況を思い巡らしていると、私たちは希望に目を向けることができなくなるのです。まるで希望がないかのように感じるのです。彼は言いました。「高ぶる者は私のために穴を掘りました。」と。狩りのことです。動物を狩るときの罠のことです。何も知らない動物たちが獵師の掘った穴に落ちていくその姿です。難しいことはありません。私たちはすぐに想像できるでしょう。十分に大きな穴を掘ってその上の部分を何かで隠すのです。まるで普通に地面が続いているかのようですが、それに気付かない動物はそこを歩いて行ってその穴の所に足をのせて穴の中に落ちるのです。そして、捕えられ殺されるのです。

著者が言うことは、私の周りにはこのような穴しかないということです。神の前に高慢で神に逆らい続ける者たちは、私のために穴を掘っていると言っているのです。穴を掘っていたのです。彼の周りにはそのような敵がいて、彼の周りの敵たちは彼を何としてでも陥れようとそのような罠を張り巡らしていたのです。この詩篇には数回、このような罠についても言及が確かにあります。彼はそれを実際に見近に感じていたのでしょうか。なぜ、こんなことをしたのでしょうか？なぜ、敵はこのような穴を掘ったのでしょうか？それは彼らがこの著者を見て憎んでいたからです。憎んでいた理由は、彼らが神のみおしえに従わず、この著者が神のみおしえに従って歩んでいたからです。当然です。聖書は私たちに約束します。はっきりと宣言します。

・神のみおしえに従うゆえに迫害を受けること：

ヨハネ 15：20＝「…もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」とイエスは弟子たちにこのように言われました。

Ⅱテモテ 3：12＝「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」、パウロはテモテにこのように言いました。ですから、ある意味で、彼が生きていた迫害の生涯は、彼が神の前に正しく生きようとしているゆえに起こる当然のことだったのです。それゆえに、パウロは神に目を向けて神の前で感謝をしつつはっきりとこのように宣言するべきだったのかもしれない。

イザヤ 51：7-8＝「義を知る者、心にわたしのおしえを持つ民よ。わたしに聞け。人のそしりを恐れるな。彼らののしりにくじけるな。：8 しみが彼らを衣のように食い尽くし、虫が彼らを羊毛のように食い尽くす。しかし、わたしの義はとこしえに続き、わたしの救いは代々にわたるからだ。」、「義を知る者、心にわたしのおしえを持つ民」と、それがまさに詩篇の著者だったのです。「わたしに聞け。」と神は言います。「人のそしりを恐れるな。彼らののしりにくじけるな。」と。皆さん、著者はこの真理を知らなかったと思いますか？私は思いません。彼はよく分かっていたでしょう。

マタイ 5：10＝「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」と、イエスはこのように言われました。

著者はそのことを知っていたし、そのことを理解していたはずですが。けれども、彼は自分の周りに目を向け、そこにある苦しみに目を奪われてしまったのです。確かに、86節にあるように著者は「あなたの仰せはことごとく真実です。」と告白します。神のみことばが、神の約束が確かであることを彼は認めているのです。でも、実はこの86節の一番興味深いところは、この86節の真ん中にある「真実です」ということばのその次に出て来ることばが「偽り」とことばであることです。「真実」と「偽り」が原文では対比して書かれているように記されているのです。「神のみことばは真実です」と言いながら、「でも、偽りだ」と言うのです。「彼らは偽りごとをもって私を迫害しています。」と。

この著者にとって、神の真実よりも現実的だったのは彼の敵たちの罠だったのです。彼の敵の攻撃だったのです。確かに、神のみことばは真実だけれども「でも、実際に見てください。敵たちは自分よりも優れた立場にあり、敵は私を苦しめているのではないですか。」、だから、彼は叫ぶのです。「助けてください。主よ、どうか私を助けてください！」と、そのように願うのです。彼の思いは自分の周りにいた敵に向けられていました。確かに彼は、神の真実を知っていたのですが、彼の心はそれでもなお落胆の中にあり、勇気を持ち続けることが困難だったのです。周りにはいる高慢な者たちによって、彼の心

は喜びを奪い去られていました。周りにいる敵たちの手によって、彼の心は、彼の思いは落胆と絶望に支配されていたのです。

皆さん、周りの状況を見たら希望など見出せないことはたくさんあるではないですか？「この状況を見てください！」とよく聞きませんか？「どのようにしてここから前に進んでいったらいいのですか？」と私たちは自分自身によく問いかけるのです。この著者も同じことをしたのです。皆さん、知っていましたか？私たちが周りの状況を見続ける限り、そこに私たちは絶対に希望を見出すことはできないということを…。なぜなら、私たちの周りの状況には希望がないからです。だから、彼は立ち上がるのがなかなかできないのです。

2) 自分の思いの中で予想する結果に思いを寄せるから

87節の前半で、彼はもう一つこのようなことを言います。希望を隠してしまっているのは、周りの状況に彼が思いを寄せるからだけでなく、希望を見出すことができないでいるのは、彼が自分の思いの中で予想する結果、結末に思いを寄せるからです。87a節「**彼らはこの地上で私を滅ぼしてしまいそうです。**」と、直訳すると「**彼らはこの地上で私をほとんど滅ぼしています。**」となります。もうほんの少ししかないということです。もうほとんど彼らは私を滅ぼしてしまいましたと言うのです。最初に、ここには81節、82節で使われたことばと同じことばが使われていると言いました。「もう、おしまいだ」と言っているのです。絶望の中において「もうダメだ」と言うのです。神に助けを求めたのは彼の切実な思いからでした。それが間違っていることはありません。むしろ、正しいことをしているでしょう。彼は神の誠実さを思い出し、神の約束の真実さを思い出し、神さま、どうぞその約束の通りに私を助けてくださいと願ったのです。でも、周りの状況を見つめる時に、そして、その状況のゆえにきっと起こるに違いない結論を考えた時に、彼には希望を見出すことができなかったのです。

なぜなら、周りを見ると、そこには穴しかない、そこには罠しかないと言うのです。「私が一歩足を踏み出したら私はもう終わりだ。だから、私はもうほとんどおしまいだ。」と言っているのです。皆さん、この詩篇の著者の叫びが聞こえますか？その痛みが見えますか？確かに、著者は神のことを信頼し、神を信じ続けていこうとします。だから、神に助けを求めるのですが、彼は自分の敵のせいでもう自分はおしまいだと思っているのです。もう後ほんの少しで彼らは私にとどめを刺すと言います。81節から見て来て、彼のたましいは助けが来ないゆえに疲れ果てていました。彼の目はもう見るができなくなっていました。なぜなら、神からの慰めを見るのが一切できなかったからです。むしろ、彼が見ることができたのは自分の周りにある罠だけでした。彼が見ることができたのは、いかに自分が益のない者であり、どうしようもない者であるかということだけでした。だから、彼は言ったのです。「もうおしまいだ」と。

彼は周りの状況を見て結論を出そうとしているのです。その状況が余りにも酷いことを感じて、それに心奪われて彼は結論を出すのです。「私はもうおしまいだ」という結論です。だから、彼は泣き叫ぶのです。「助けてくれ」と。なぜなら、自分の状況を見るなら、先には良いことなど一つもないように思えるからです。私たちは頭の中で、主が私たちに助けてくださることを知っています。神は私たちの助け主です。私たちは心の中で、神は私たちが担うことができない試練を与えない方であるということを知っています。私たちの能力を越えたことをしないことを知っているのです。私たちは自分たちの口で「神さまは私たちに良いことしか為さらない」と言います。そして、私たちは「どんなことが起こっても神に希望を持つべきだ」と告白します。

でも、現実はどうですか？実際には、頭の中で分かっている、現実的には「主は私たちに助けない。」と言うのです。私たちは心の中で、神が私たちの能力を越えた試練を与えることがあると考えます。「だって今の状況を見てください、もうダメです。」と言いつづけます。私たちは自分たちの口をもって「神さまは私に対して悪を為す方である」と言います。皆さん、つぶやきませんか？神の良さに感謝するのではないのです。そして、私たちは人生の中に起こる様々な試練は私たちから希望を奪い去るにふさわしいものであるのだと、そう宣言するのです。「神に希望を持ち続けることはできない」と。私たちが自分たちの人生を自分の視点から考えるならば、その状況を自分の視点で判断し、その状況から自分の視点で結論を見出すなら、そこには希望はありません。

神にある希望、状況を見てその状況から自分で結論を出していくその行為は、神にある希望を曇らせていきます。その場所は何と危険なところでしょう。私たちがひとたび絶望の谷底に突き落とされるなら、そこはまるで流砂のようなもので、私たちがそこでどれ程もがき苦しみそこからしっかり立って出て行こうと思っても、それを願ったとしても、絶望の力によって私たちはどんどん更なる深みへと引きずり込まれてしまうからです。皆さん、そのような経験はありませんか？皆さんは、そのような思いを

もったことはありませんか？私はあります。希望が見えないときに…。状況を見たときに、神の前にどのように希望を持ったらいいのか分からなくなる時があります。そこからどのように逃れることができるのでしょうか？そのように絶望しか感じることができない状況の中で、どのようにして立ち上がってその流砂から抜け出していくことができるのでしょうか？著者は言います。彼はいのち綱を持っていたと。彼はそこから這い上がることができるというのです。その命綱が何か、皆さんはもうお分かりですね。それは神のみことばです。

B. 神のみことばに立つときに希望を得る 87b-88節

87節の後半から88節にかけて、著者は私たちに、私たちが神のみことばに確かに立つ時に、私たちは希望を得ることができると教えてくれます。神のみことばに立つ時に私たちは希望を持つことができるのです。最初に言いました。この81節から88節の最も暗いと言われる詩文節にあってさえ、この詩篇の著者は、神のみことばに対する望みを忘れることをしませんでした。だから、81節でも83節でも86節でも、彼は何度も繰り返して、彼自身の神のみことばに対する願い、望み、信頼、その献身を言い表わして来ました。確かに、人生の状況や、彼自身が持っていた期待、自分の感情や自分の体験、また、そこから導き出される自分で考えた結論というものが、神のみことばに対する献身を曇らせることができました。握りしめていた握力を弱めることがあったのです。この著者は誘惑されていました。「それを手離しなさい。希望なんてないから。」と言われて、彼は揺るがされ焦点を失いかけていたのです。

でも皆さん、87節の後半で著者は何と言っていますか？「しかしこの私は、あなたの戒めを捨てませんでした。」というのです。彼は過去を振り返るのです。このわずかな瞬間に彼は「捨てませんでした。今までして来たことを考えましょう。」と言ったのです。確かに、周りの状況は酷いけれど、もう一度整理して考えよう、過去を振り返ろう、自分は何をして来たのだろうというのです。皆さん、覚えていますか？彼はここまでの間にもうすでにこのようなことを言って来ました。

1-2節＝神のみことばは祝福の源である。

9-11節＝神のみことばは自分の道を聖いものにする。

24節＝このみことばはあらゆる宝よりもすばらしい価値のある喜ばしいものだ。このみことばは私たちの喜びであり、私たちの相談相手、助言者だ。

37, 39節＝このみことばは私たちにいのちを与える。

41節＝このみことばこそが神の恵みと救いの源であり、

54節＝彼自身の歌でした。

66節＝このみことばは知識と理解の源であり、

72節＝そして、幾千もの金や銀よりもすばらしいものです。

状況は一切変わりません。敵はいるのです。周りには罠がたくさんあるのです。落とし穴だらけです。彼の敵は未だに誇らしげに勝ち誇っていました。先を見るなら真っ暗だと思ってもおかしくない状況の中にいました。でも、彼は思い出したのです。

これは選択の問題です。彼は神のみことばが何を約束しているのかを知っていました。彼は神がここまでの人生の中であってどんなことを為してくださったのかをよく分かっていました。このわずかの瞬間に、彼は自分の生きて来た人生と彼の敵の人生とを比較し、明確な回答を出したのです。決断したのです。選択したのです。「私はこの道を、今まで生きて来たこの道を歩み続けます。」と。「神のみことばから離れて生きることを私はしません。」と。だから、彼は唯一納得のいく、唯一論理的な結論を出して次のことばを言うのです。88節「あなたの恵みによって、私を生かしてください。私はあなたの御口のさとしを守ります。」と。「神の絶えることのない、決して、緩むことのないその恵みと愛のゆえに、それをもって私をいきいきと活力を与えてくださらないなら、私はあなたのみことばを守って生きていくことができないから、私はこの道を進んでいくのです。だから、主よ、どうぞ、あなたの恵みをもって、愛をもって私を力づけてください。そうして私が喜びをもって正しく、決して望みを失うことなく生きることができるようになってください。」と。

皆さん、彼は「信じる」ということを選択したのです。彼は神と神のみことばに信頼を置くことを選んだのです。彼がたとえどのように感じているのか、考えているのかということは問題ではなかったのです。彼は一つのことばが分かっていたのです。神の恵みは私を支えるのに十分であること、神のみことばに偽りがないことを。その恵みによって彼が力づけられるなら、たとえ、どれ程深い谷底を歩むことがあったとしても、どれ程高い山に登らなければいけなかったとしても、どれ程広い海を渡らなければならぬとしても、「私はそれができる。」と信じることを決心したのです。

私たちは「知っている」と言います。「神のみことばが真実であると知っている」と言います。「神の約束は神は必ず成してくださると知っている」と言います。「この全世界が与えようとする何よりも、どんなものよりも神のみことばが確かであることを知っている。」と私たちは言います。それなら、私たちが聞かなければいけない最も大切な質問はこれです。「私は私が信じたくないと思う時であっても、神のみことばを信じるかどうか？」ということです。問題は選択だったのです。

同じような困難な中を歩む時に、詩篇の別の著者は42篇でこのようなことを語っています。42：9-10「私は、わが巖の神に申し上げます。「なぜ、あなたは私をお忘れになったのですか。なぜ私は敵のしいたげに、嘆いて歩くのですか。：10 私に敵対する者どもは、私の骨々が打ち碎かれるほど、私をそしり、一日中、「おまえの神はどこにいるか。」と私に言っています。」、状況が似ています。そこで彼は言います。

11節「わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。なぜ、御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の救い、私の神を。」、私たちは苦しい中を通ります。突然、見えないところから困難がやって来ます。ふと気を緩めていると知らない間に敵の掘った穴に落ちてしまっていることがあります。そんな時に周りを見つめると、私たちは困難で囲まれているのを知り、敵の罠によって心奪われてしまうことがあります。そして、私たちは「ああ、あのころは良かった」と言って、今の状況と比較して嘆き悲しみ絶望の坂をまっしぐらに下っていきます。「もうダメだ。希望はどこにもない。」と思います。皆さんも経験ありますね。私もあります。私たちはみな絶望するではないですか？落胆するではないですか？「もう破れてしまった。もう先がない。」と考えることがあるではないですか？その時こそ、私たちは神の十分な恵みと愛に目を向けないといけないのです。「私は信じます。」と言うのです。うちひしがれているたましいに向かって言うのです。「なぜ、おまえは絶望しているのか。神を待ち望め。あなたの恵みによって私を生かしてください。」と。

最も濃く深い雲が私たちの希望を消し去ってしまうようなときであっても、私たちはそこに希望があることを知っているのです。なぜなら、神が私たちにこのみことばを通してそれをはっきりと宣言してくれるからです。皆さん、信じていますか？このことばを。皆さんは信じておられますか？この希望を与える神を。それなら、私たちはたとえそこに絶望しか見ることができなかつたとしても、この神にしがみついて、そのいのち綱をしっかりと握りしめて、絶望の縁から這い上がって来ることができるのです。願わくは、私たちがみな、そのような歩みをして行くことができるように。主の助けがそこにあることを心からお祈りいたします。